

## 高校推薦入学試験〈小論文〉

次の記事を読み、感想を述べなさい。また、あなたが看護師を志す動機と、どのような看護師を目指すかも書いてください。(800字以内)

フローレンス・ナイチンゲール(1820~1910)。多くの日本人にとってなじみの深い、偉大な看護師の名前だ。(中略)「白衣の天使」「ランプを持つ貴婦人」「クリミアの天使」。さまざまに呼ばれてきたナイチンゲール。その実像は、薄っぺらいヒューマニストなどではなく、女性が大学に行くのが難しく、働くことも難しかった時代、鉄の意志で道を開いた女性だった。

彼女が生きた時代は、産業革命によって、世界全体としては豊かになっていった時代だが、一方で格差が生じ、貧民街が生まれた。町の人たちの生活を見てがくぜんとしたナイチンゲールは、看護師を志す。この感性がすごい。

当時、看護師に対する社会的評価は低かった。上流階級の社交界にデビューさせたかった両親は猛反対。でも、彼女は負けなかった。

各地の病院を回り、独学で看護を学んだ。31歳になって初めて看護学校で勉強する。1854年から2年間、クリミア戦争に従軍し、負傷兵の看護にあたった。(中略)彼女が毎晩、ランプを持って患者を看護して回ったのは、このクリミアでの2年間だけだったが、1万8000人もの兵士を死なせた悲劇を絶対に忘れないと、彼女は心の中で誓った。(中略)

クリミアで彼女は、兵隊たちが家族へ手紙を出したり送金したりできるようにした。兵隊たちが給料のほとんどを酒につぎこんでいるのを見て、故郷や家族とつながることで希望を持たせようとしたのだ。野戦病院の中に、本を読んだりできるデイルームをつくった。こうした空間の有効性を理解していたのである。ナースコールや、患者の食事を運ぶリフトも考案した。患者中心の改革だった。

帰国した彼女は、150年後の現在でも看護師たちのバイブルになっている名著「看護覚書」という本を著す。医療の大改革である。

当時の英国では、首都のロンドンですら5人に2人が5歳前に亡くなっていた。難しい手術が行われるようになってはいたが、大きな病院ですら、80%の患者が手術後に亡くなった。そのほとんどが感染症によるものだった。ベッドの間隔が狭いことが感染症の原因だと気づいた彼女は、1人当たりの患者のスペースを9平方メートルに広げた。(中略)患者を巨大なワルームに置き、教育された看護師の視察を重視した。こうして、死亡率が激減した。

彼女は改革を実現するために、理解者を広げる能力にたけていた。時には陸軍大将に「ロクデナシ」と手紙を書いたりしながら、手を緩めずに国と軍を変えていった。弱い人を救うためなら、権力に負けなかった。統計学にもたけていた。統計的な数字を見せながら説得していった。彼女のやり方は、違う分野で生きる現代の人々にも参考になるだろう。

ナイチンゲールは予防医学や在宅医療の重要性を語っていた。「病院覚書」では、回復病棟の必要性を訴えた。現在、日本では回復期リハビリ病棟や介護老人保健施設など「中間施設」と呼ばれるものがつくられている。「病院」「在宅」「その中間」の三つによる構成は、まさにナイチンゲールの構想どおりだ。(中略)先見性がすごい。

彼女はクリミア戦争で評価を得たが、実際にはクリミア戦争で挫折した。その挫折を乗り越え、90歳まで独身のまま、看護の改革に全力投球した。(中略)今、日本中が看護師不足である。だが、看護はやりがいのある、社会的評価の高い職業だ。看護の仕事をしてみたいと思う若者が増えてくれることを、切に願う。